大学におけるボランティア活動体験プログラムの実践について

山西　裕美

A Study on the first step program for the volunteer activities

Hiromi YAMANISI

Abstract

In the stream of educational reforms in Japan, there is a need for universities to give students opportunities to volunteer.

For this purpose, we the Volunteer Center of Kyusyu University of Health and Welfare, started a program of volunteer activities for our students with the help of area social welfare councils. In spite of some difficulties, such as the timing of the program and the small number of participants, the students gained a great deal of experience.

Particularly, our program had a study and training period before the activities, and also after the activities. We also had meetings for students to express how they felt about experiences. This was very different from typical volunteer activities.

Although the program lasted only seven days, this program was the first step for our students toward independent volunteer activities.

Key words：volunteer program, volunteer training, welfare council

キーワード：ボランティアプログラム、ボランティア研修、社会福祉協議会

2006. 1.18 受理

はじめに

1995年1月17日の阪神・淡路大震災では、学生から社会人まで幅広い年齢層が被災地に向かったパワーの大きさに社会は大きな衝撃を受けた。この時に全国から駆けつけた災害救援に対するボランティアの果たした役割の大きさが注目され、1995年は日本における「ボランティア元年」と呼ばれるようになった。

これ以降、行政の役割とも異なったボランティアの社会的役割の重要性が認識されるようになり、ボランティア活動への参加者は急増している。教育機関においても例外ではなく、多くの大学にボランティアセンターが設置されるなど、学生へのボランティア教育や活動に対する支援がはかられるようになった。2000年には本学と同じ学校法人である吉備国際大学の社会福祉学部に全国に先駆けて福祉ボランティア学科が設立された。翌2001年の「国際ボランティア年」には同学内にボランティアセンターも開設されている[1)]。翌年、本学にも高梁学園ボランティアセンターの分室が設置され、2004年からは九州保健福祉大学ボランティアセンターとして活動に取り組み出した。学生のボランティア活動に対する支援は大学に期待される大きな社会的役割の一つになりつつあるといえる。

本稿は、このような近年活発な大学とボランティア活動をめぐる社会的動きの中で、昨年本学ボランティアセンターが実施したボランティア活動への導入となる体験

九州保健福祉大学ボランティアセンター、九州保健福祉大学社会福祉学部臨床福祉学科　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714番地1号
Volunteer Center of Kyusyu University of Health and Welfare Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare,Kyusyu University of Health and Welfare
1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki Pref.,882-8508 JAPN

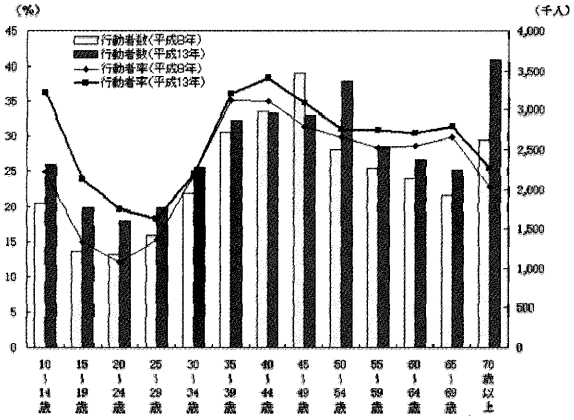
プログラムを、大学生に対するボランティア活動への支援のあり方の一つの実践としてその位置づけを明確化し、内容およびその結果について考察を行い、その有効性について考察することを目的とする。

日本の若者とボランティア活動の現状

総理府の「平成13年社会生活基本調査（平成13年10月実施）の結果」によると、わが国のボランティア活動の状況では、若者によるボランティア活動の参加率は必ずしも高くはない。年齢階級別で比較すると、40歳代前半が38.4％と最も高く，逆に20歳代後半が18.3％と最も低くなっている。20代前半と併せても20歳代は他の年齢層に比べると、ボランティア活動への参加率は最も低くなっている。もっとも、平成8年の調査結果と比較すると、ここ数年間に10歳代前半から20歳代前半でボランティア活動への参加率は大幅に上昇していることが分かる（図1）。

このように、わが国の若者のボランティア活動への参加率が低いことは、カナダや韓国という他国の若者との比較でも指摘されている。地域社会での施策や学校教育での取り扱われ方など社会的背景の違いはあるが、日本の若者たちにとって「ボランティア＝偽善」といったネガティブなイメージが強いことに加え、ボランティアイメージが曖昧であることが調査結果から明らかにされている。

さらに、若者層のボランティア関心度の高さが活動へ結びついていくような社会的契機や仕組みが貧困であることも問題点として指摘されている[2]。



総理府「平成13年社会生活基本調査（平成13年10月実施）の結果」より

図1 年齢階級別「ボランティア活動」の行動者数，行動者率（平成8年，13年）

しかし、図1からも、過去と比較すると、若者のボランティア活動への参加率は他の年齢よりも大きく伸びていることから、活動への意欲の高まりが覗える。他者理解力、集団調整力や社会的教養など、ボランティア活動による「学びの効果」は各国共通であると上記の調査からも明らかにされており、日本の若者に対しボランティア活動への参加を促す何らかの働きかけが必要であるといえる。

そもそもボランティア（volunteer）とは、その語源はラテン語のボランタス（VOLUNTAS）からきており、「意志」という意味である[3]。そのためボランティアでは、自由意志による活動であるということが重要な概念となり、ボランティア活動には、①人びとの参加の自由意志を尊重し、②地域や社会全般の公共の利益を追求し、③営利や権力・社会的権威を目的としない非営利活動の基礎という特性がある[4]。

本来、このように自発的意思による活動であるボランティア活動に対し、なぜ大学が学生に参加を促すための取り組みをする必要があるのだろうか。最近のボランティア活動をめぐる社会状況の特徴には、単なる個々人にまかせた自主的な活動ということだけでなく、活動の教育化がある。いじめ、不登校、非行など子どもの発達のゆがみが多発するなかで、これら発達課題に応えるため、「体験教育」の一環としてボランティア活動を推奨する動きが顕著になったというものである[5][(1)]。学校教育改革の流れの中で、教育現場においても特別活動としてボランティア学習への取り組みが進められている[6][7][8]。

このような教育改革の中で、ボランティア活動の教育化は大学にも及んでいる。次に大学でボランティア教育が取り組まれるようになったその社会的背景を確認していくことにする。

大学教育とボランティア活動

今日、大学での学生教育へのあり方についても新しい視点が求められている。平成10年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革の方向について」では、ボランティア活動の教育的意義を明らかにし、大学教育においても授業など多様な方法でボランティア活動への積極的取り組みをおこなう必要性が提言されている。

また、平成14年の中央教育審議会による「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」答申においても、大学等で学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励・支援するために次の2点の取り組みが求められている。1点目は、ボランティア講座やサービス・ラーニングなどに関する科目を開設し、学生の自主的な活動を単位として積極的に認定するなど教育活動として取り

組むことである。2点目は、学生の自主的活動に対する奨励･支援策に取り組むことである。具体的には学生に対する学内のボランティア活動などの機会を提供することやボランティアセンターを開設し、情報や学生に対するプログラムを提供するなどして学生に対する支援体制を充実させることなどが挙げられている。

ボランティア活動などの奉仕活動に教育として取り組む必要性は、大学に対してだけでなく、初等中等教育段階も含め青少年の育成の視点から年齢に応じた取り組みが求められている。その背景としては、前節でも触れた今日みられるいじめ、暴力行為、ひきこもり、凶悪犯罪の増加など青少年をめぐる様々な問題の発生がある。

大学においても、大学生の社会的無関心、学習動機の不在、自己中心的行動、対人関係からの回避、自己責任の回避などの問題が日常的に見られ、それまでの思考的知能（ＩＱ）重視の大学教育の限界が指摘されている。その中で、やる気、共感、対人能力など人間生活の基礎となる情動的知能（ＥＱ）を育む教育の重要性が指摘されており、このような教育は社会と関わる経験を通じて得ることに意味があるとされる。これはアメリカの大学でサービス･ラーニング（Service Learning）の出てきた背景と共通している。

サービス・ラーニングとは、ボランティアサービスを提供する学生側とそれを受ける側とが対等の互酬関係に立ち、学生がボランティア活動の経験を授業内容に連結させ学習効果を高めると共に、責任ある社会人を育てることを目的とするものである。つまり、従来のボランティア活動のように、提供する側からの一方的な奉仕活動（サービス）だけではなく、奉仕活動を通してそれを受ける側からまた活動自体から学ぶ（ラーニング）という双方向的要素が大きな特徴であるとされる[9]。

日本の大学教育では、このサービス・ラーニングのほかにも社会活動やフィールドワーク、奉仕活動などとして取り組まれつつある。ボランティア活動と異なる名称で取り入れられる傾向がある理由としては次の指摘が代表的である。即ち、ボランティア活動を大学の教育に取り入れることは、ボランティア活動と引き替えに単位を取得するということにも繋がり、ボランティア活動の持つ無償性や自発性という特徴と相反するよう受け取られるというものである。

そのため、ボランティア活動は、職業という枠組みからは自由なところにある体験学習として位置づけることが提案されている。つまり、あらかじめ想定されている職場において必要とされている技術や技能を獲得するための学習である実習とも異なるとする考え方である[10]。

どのような方法でボランティア活動を大学教育の中に取り入れるかに関してはこのように議論の余地がある。しかし、大学が学生のボランティア活動を支援することは、学生が社会の中で活動することにより多様な能力や社会性を身に付けられることや、大学の地域貢献の視点からも必要とされている流れであるといえよう。実際に、ボランティア関連科目の開講状況は、2003年1月の調査時で、すでに大学では32.5%、短大でも21.6%となっており、福祉関係学部のある大学では53.5%さらに高く、福祉関係学部の無い大学のほぼ2倍であることが報告されている[11]。

また、大学にとっての地域貢献だけでなく、受け入れる施設側にとっても、学生に対しボランティア活動の場を提供することは、学生の教育に役立つだけでなく、地域に開かれた施設を目指していることや、利用者への細かい対応ができるなどメリットも指摘されている[12]。

本学の大学理念は「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし社会に有為な人材を養成する」ことである。ボランティア活動の体験を通じて学生の多様な能力を伸ばす機会を提供することは、本学の理念にも適うことであると考える。

しかし、本学では、現時点においては教務カリキュラム上のボランティア関連科目は開講されていない。そのため、本学ボランティアセンターとして、初めてボランティア活動を体験する学生でも参加しやすい機会を提供し、その後の自発的ボランティア活動への橋渡しを行うことにした。

「初めてのボランティア活動体験プログラム」について

目的と名称

大学教育の中にボランティア活動を取り入れる動きが活発になってきているが、今日の若者はボランティア活動への関心は高くても、参加率は他の年齢に比べて低いのは「図1」で確認した通りである。本学でも、町おこしのイベントや地域の施設などからボランティアの依頼が毎年増えているが、これらに積極的に参加している学生は限られており、関心がありながらも、なかなか自分から踏み出すことができないでいる学生が多いのが現状である[2]。

そのため、本学ボランティアセンターは、ボランティア活動をしたことがない、あるいはボランティア活動をしたいが何をしていいか分からないという、自分からは一歩を踏み出しかねている主に1，2年生の学生を対象に、ボランティア活動の体験プログラムを提供し、学生

ボランティアの育成に努めることによって学生のボランティア活動への支援をはかることにした。プログラムの名称はボランティア活動への導入という趣旨から「初めてのボランティア活動体験プログラム」とした。

なお、本プログラムは前述のように本学ボランティアセンターとして行い、教務カリキュラムとは別である。そのため、単位の認定はなく、本プログラムへの参加および修了を証明するに止める。参加は学生による任意であり、学生の自主的取り組みへの支援として位置づける。

方　法

地域でのボランティア活動は地域福祉の推進を担う社会福祉協議会にその窓口が設けられている。今回のプログラムを実行するに当り、地元の延岡市社会福祉協議会、門川町社会福祉協議会、日向市社会福祉協議会に協力をお願いした。その結果、延岡市社会福祉協議会の延岡市ボランティアセンター担当職員、門川町社会福祉協議会の地域福祉係主事の職員、日向市社会福祉協議会の日向市ボランティア・市民活動センター職員と一緒にプログラムの企画や運営を行うことができた。また、事前研修の講師依頼や学生のボランティア活動受け入れ施設のコーディネートも各社会福祉協議会の職員が行った。

実施時期は、対象である本学の社会福祉学部、保健科学部、薬学部の1，2年生が参加可能な前期試験日程が終わった後の7日間（土日は除く）という短期間に行うこととなった[3]。参加学生の募集方法は、学内の全教員にこのプログラムのパンフレットを配布し、各チューター経由で学生への周知をお願いすると同時に、学内の掲示板にも張り出し直接学生に呼び掛けを行った。

さらに、スチューデントサポートセンター学生課窓口にパンフレットと申し込み用紙および申し込み用紙投函用のポストを設置した。企画段階では、実施時期については十分検討を行ったが、募集時期には集中講義が重なるなどが起こり、その結果、参加希望学生は計13名、うち12名が実際にこのプログラムに参加した。参加学生の内訳は男子学生が8名、女子学生が4名、学年別では1年生が5名、2年生が5名、3年生が1名、4年生が1名であった。

協力施設等

各社会福祉協議会のボランティア担当職員のコーディネートによる今回のプラグラムの事前研修の講師や受け入れ先施設は以下の通りである。

事前研修の講師には、市民ボランティア、肢体障害者福祉協会メンバー、老人福祉関連のＮＰＯ法人職員、本学児童福祉関連科目の非常勤講師、河川環境保護のＮＰＯ法人職員、障害児者地域療育等支援事業コーディネーター、本学保育サークルが協力してくれた。

学生ボランティアの活動受け入れに対し協力を約束してくれた地元の施設は、老人福祉分野では、特別養護老人ホーム4ヶ所と通所リハビリテーション1ヶ所であった。障害児者福祉分野では、知的障害者入所施設1ヶ所、身体障害者入所施設1ヶ所、身体障害者通所授産施設1ヶ所、知的障害児通園施設1ヶ所であった。児童福祉分野では、保育所および保育園が3ヶ所であった。全部で計12ヶ所、定員数は40名を上限とした。

事前研修の講師や活動受け入れ先施設は、学生の関心に応えられるよう、できるだけ選択の幅が広くなるよう心掛けた。

内　容

長沼は、ボランティア学習の学習過程としてＰ（Preparation＝準備の段階），Ａ（Action＝行動の段階），Ｒ（Reflection＝振り返りの段階）の3つの段階が必要とされ、これは「ＰＡＲサイクル」と呼んでいる[8]。各段階について、長沼による説明を簡略に述べていく。

Ｐ段階の前半では動機付けを行い、自分の関心のある社会的課題などを自己確認する段階である。Ｐ段階の後半では、自分が参加する活動に対する様々な準備を行う。できるだけ参加者自身による自発的な学習計画を立てていくことが望ましい。

第二段階のＡ段階は、活動体験である。ここでは三者とのかかわり（他者とのかかわり、社会とのかかわり、一緒に行動した仲間とのかかわり）を通しての学びを経験する場である。多様な体験活動を行う過程で他者を知り、自分を知り、社会を知る契機となる。

第三段階のＲ段階では、体験したことを客観的に見つめ直し、自己理解や他者理解に役立てつつ、次の学習内容に生かしていく段階である。この段階では、社会的課題の再発見と内省、次のＰ段階への橋渡しが行われる段階である（図2）。

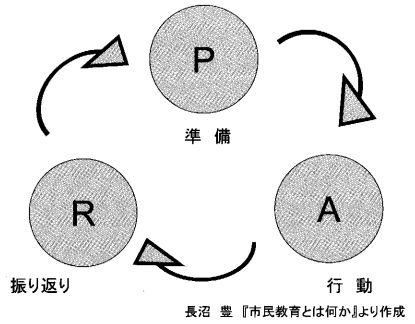


図2　ボランティア学習のＰＡＲサイクル

今回我々が行ったボランティア体験プログラムでも、普段施設などからの依頼によってボランティア活動に参加する場合とは異なり、事前研修と事後研修を現場でのボランティア活動の前後に取り入れ、ボランティア活動を通じての学びの重要性に着目しプログラムを構成した。全体の流れは、「ＰＡＲサイクル」と同様、「事前研修→活動体験→事後研修」を基本とした。

福祉領域を中心としたボランティア活動の種類は広範囲にわたるが、今回は主に地元施設を中心とした地域密着型のサービス活動を対象とすることにした[5]。募集段階で参加申込書に希望の活動分野を第３希望まで書いてもらい事前にニーズの把握を行ったが、初日の研修後に改めて活動希望先を取り直し、活動先の調整を行うことにした。

研修後に改めて活動希望先を取り直すのは、従来のボランティアプログラムとの違いを出すためである。「ＰＡＲサイクル」のＰ段階では自分の関心がある課題の発見が位置づけられている。しかし、教育現場などのボランティア体験プログラムの多くは既に設定された活動の提供となりがちである。また、学生自身も自分の興味を予め決め付けてしまう傾向がある。今回のプログラムはボランティア活動への導入という視点からも、最初に多くの分野について当事者の方やその分野の講師から講話を聞くことによって、学生自身の気づきや学びを通し、改めて自分の関心を見つめ直して欲しいという目的があるためである。

事前研修の２日目には、最終的に決定した活動希望先に応じた知識や技術についての研修を受け、３日目から６日目までの４日間は実際に現場でボランティア活動を体験する期間とした。そして７日目には再び本学に戻り、ＫＪ法などによりボランティア活動体験についての振り返りを行い、他の参加者の前で学びについての報告をし、体験を共有できるようにした（表１）。

○事前研修

初日の事前研修では、オリエンテーションとして本学ボランティアセンター長による挨拶と社会福祉協議会担当職員の紹介、プログラムの目的と流れについての説明、延岡市ボランティアセンター職員によるボランティア活動保険の説明を行った。

次に、第一日目の事前研修の目的である学生に対するボランティア活動への参加の動機付けと自分の興味や関心を形成するため、外部講師による講話を取り入れた。最初に、市民ボランティアによるボランティア活動に参加する意義についての講話を行い、次に自身が途中から障害を持った肢体障害者福祉協会のメンバーによる当事者体験の講話を聞かせてもらった。また、老人福祉の関係者や児童福祉の関係者からそれぞれの分野における講話をしてもらった。さらに、今回のプログラム期間中には具体的活動が取り込めなかったのだが、水郷である地元延岡市で河川の環境保護に努めるＮＰＯ法人からも参加してもらい、身近な環境問題の視点から現在取り組んでいる河川保護活動についての講話を聴かせてもらうことにした。

表１　「初めてのボランティア活動体験プログラム」の内容

<table>
<tr><th colspan="2">日程</th><th colspan="2">内　　容</th></tr>
<tr><td colspan="2">募集期間</td><td colspan="2">プログラムの公示と参加者の募集</td></tr>
<tr><td colspan="2">1日目
午後</td><td colspan="2">事前研修(本学)
プログラムの目的と流れの説明
ボランティア活動保険の説明(市社会福祉協議会)
活動先種別ごとのボランティアに関する講話&質問等
・ボランティアについて
・老人福祉とボランティアについて
・身体障害者福祉とボランティアについて
・児童福祉とボランティアについて
・環境問題とボランティアについて*
ボランティア活動希望先の取り直しと調整</td></tr>
<tr><td rowspan="5">2日目</td><td>午前</td><td>事前研修(本学)
活動上の基本的注意事項の確認
先輩との交流会
“ボランティア活動の心がまえ”について
ボランティア活動保険加入手続き(市社会福祉協議会)</td></tr>
<tr><td rowspan="4">午後</td><td>事前研修(本学)
活動先種別に応じた事前研修プログラム</td></tr>
<tr><td>老人・身体障害者福祉事前研修</td><td>門川町社会福祉協議会職員による車椅子等の介助研修</td></tr>
<tr><td>知的障害児者福祉事前研修</td><td>障害児者地域療育等支援コーディネーターによる研修</td></tr>
<tr><td>児童福祉施設事前研修</td><td>保育サークル学生らによる遊びの指導</td></tr>
<tr><td colspan="2">3-6日目</td><td colspan="2">活動期間(各活動先)
施設におけるボランティア受け入れマニュアルを送付済み
「ボランティア活動の合意書」を活動先に提出
巡回訪問(各社会福祉協議会職員と一緒に活動先を訪問)</td></tr>
<tr><td colspan="2">7日目
午後</td><td colspan="2">事後研修(本学)
各活動先種類でのグループ・ディスカッション(KJ法)
全体会でのグループ発表
活動報告書の提出
修了証書の配布</td></tr>
</table>

これら講話の最後に、ボランティア活動の最終的な希望先を改めて取り直し、調整を行った。その結果、特別養護老人ホームが２ヶ所（学生は各２名）、知的障害者

入所施設が１ヶ所（学生１名）、知的障害児通園施設１ヶ所（学生２名）、保育所１ヶ所（学生４名）、保育園１ヶ所（学生１名）の計６ヶ所となり、申し込み段階の希望先とは少し異なる結果となった[4]。

写真１　オリエンテーションの様子

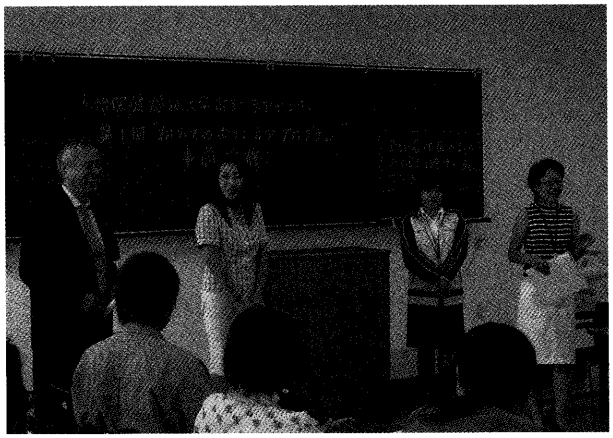


写真２　介助についての事前研修の様子

事前研修の２日目の前半は、ボランティア活動に関する基本的注意事項について話をした後、ボランティア活動に積極的に取り組んできた４年生の先輩たちとの交流会を持った。本学の学生便覧には、初めてボランティア活動に取り組む学生に対して学生達が作成した“ボランティア活動についての心がまえ”が記載されている。先輩達からその内容に沿って、自分達の経験を交えながら、今回参加する学生の不安や心配、質問などに対してアドバイスをしてもらった。その後に市社会福祉協議会の担当職員によりボランティア活動保険の加入手続きを行った。

事前研修２日目後半には、活動希望先に応じた知識や技術についての研修を、外部講師を交えて行った。老人福祉施設でボランティア活動を行う学生に対しては門川町の社会福祉協議会から指導に来てもらい、車椅子の介助法など簡単な介助についての研修を行った。知的障害児者福祉施設でボランティア活動を行う学生に対しては、地元で障害児者地域療育等支援事業コーディネーターとして活動する講師より講義形式の研修が行われた。また、児童福祉施設で活動する学生に対しては、本学保育士課程の学生を中心とした保育サークルのメンバーによって、折り紙や絵描き歌、手遊びなど児童との遊び方の研修を行った。ボランティア活動を体験するための事前研修としては、決して十分な時間が取れた訳ではなかったかもしれないが、今回は短期間のプログラム構成であったため、この２日間で事前研修を終えることとした。

○　ボランティア活動体験

プログラム３日目から６日目までの４日間は、原則として実際に現場でボランティア活動を体験する期間とした[5]。各活動先には、学生個々人による「ボランティア活動の合意書」を提出した[6]。また、体験活動期間中に筆者が各施設を巡回訪問し、施設の受け入れ担当職員や学生本人と面談を行い活動の様子を聞いた。この訪問には各施設のコーディネートを担当した社会福祉協議会職員にも同行してもらった。

巡回訪問で担当者と面談をする中で、今回のプログラム運営上の問題点がいくつか見えてきたが、詳細は後述することにする。体験活動期間は前期試験終了後という時期の設定もあり、８月最初の４日間となったため、気温が大変高く、中には体調を崩す学生もいたが全体的には無事期間を修了することができた。

写真３　保育所でのボランティア活動体験の様子

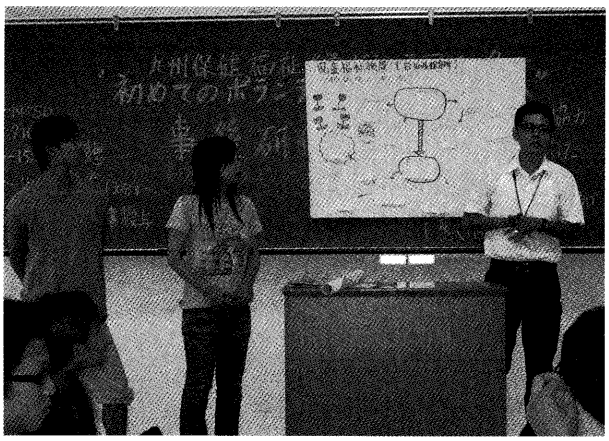
○　事後研修

プログラム第７日目は、再び本学に戻りＫＪ法を用

い体験活動の振り返りを行った。ＫＪ法のテーマ「ボランティア活動を通して気づいた新しい自分」をもとにグループ・ディスカッションを行った。老人福祉施設、障害児者福祉施設、児童福祉施設と活動先の種類ごとにテーブルを分け、それぞれのテーブルで社会福祉協議会職員が進行役を担当し、全体会で活動先種類ごとに報告を行った。全体での報告会の後、本学通信教育部教授であり大阪ボランティア協会理事長である岡本栄一教授より、学生達の報告についての感想とこれからのボランティア活動に対してのエールを受けた。

最後に今回のボランティア体験についての活動報告書を提出し、本学ボランティアセンター長である田原直廣学長より修了証書が一人ずつ手渡された。

写真４　事後研修での報告会の様子



効　果

今回のプログラムについての効果は、事後研修でのＫＪ法や報告会での内容と、提出された活動報告書に書かれた感想・意見から汲み取ることができる。全体的には大きく次の４点が挙げられる。

一点目は施設や利用者に対して理解が深まったことである。「介護と教科書に簡単に書いてあるが、実際にやるとめちゃつらい」、「先生方の保育に対する熱意に感動しました」などの施設職員の仕事に対しての記述や、「認知症高齢者との関わり方が分かった」、「（子どもの）寝かしつけが難しかった」といった活動先利用者の実際や対応について知ることができたという記述である。また、「時代劇は面白い」と、半世紀以上年齢が離れた高齢者と一緒にレクリエーションの映画を一緒に見ることにより、利用者の生きた時代に触れたことに対しての新鮮な驚きもあった。反対に「良いところだけでなく、悪いところも見られるようになった」と、理論と現実とのギャップに関する記述がみられ、福祉施設が抱える現実の課題に対する理解も深まったことが窺えた。

二点目は自分に対する客観的な理解ができたことである。「話しの流れで、笑顔が自然に目一杯出せるようになっていた」、「施設の先生に頼らず、自分なりに考え、先に行動することができた」、「自分でも役に立てる、そう思った」など、知らなかった自分の力に対して気がつくことができたというポジティブな内容の記述が多く見られた。

その一方で、「手遊び、絵本読みが上手にできなかった」、「分からないことがあったが、職員の方々に聞こうとしない場合があった」、「積極性が足りなかった」など、逆にできない自分についての記述も同じぐらい多く見られた。分かってはいてもいざとなるとできない自分が存在することに気づくことができたということであり、できる自分の発見と同様に重要な気づきといえる。本学の学生は将来何らかの現場で援助職として働くことを目的とする学生が多くを占めるが、このように早い段階で自分を客観的に理解できる機会を持つことは大事なことであろう。

三点目は、今回のボランティア体験を通し、将来の自分の仕事に対する意識の芽生えが窺えたことである。今回の参加者は全員社会福祉学部の学生であったが、「将来の自分の夢を確信できるようになった」など、社会福祉士、介護福祉士や保育士など、自分がつきたい将来の専門的仕事に対する意識の芽生えが覗えた。今回のボランティア体験は、専門職を目指しての実習とは異なるが、このボランティア経験を通じ今後の勉学や実習への動機が強まることは大きな効果があったといえるだろう。

四点目は、社会性や協調性、責任感など若者に対するボランティア体験の必要性で問われていた対社会的能力の養成である。活動報告書に記述された受け入れ施設の担当職員から個々の学生へ寄せられた言葉からも、学生たちが慣れない環境の中で、他の職員たちと一緒に懸命にその場の仕事に取り組み、利用者にも精一杯働き掛けていたことが十分窺えた。

以上、学びや気づきはあくまで学生の主観に基づくものであり、指標を作成して実際に活動先職員に数値的評価をしてもらった効果測定ではない。ボランティア活動の体験効果をどう測定するかは議論がまだ定まっておらず難しいのが現状であるが、今回のプログラムは先に記したように学生に対するボランティア体験の提供が目的であり、ボランティア体験効果についての学術的研究を目的としたものではない。そのため、学生の自己肯定感を高め、今後の活動に繋ぐという趣旨からも、従来的な気づきと学びという体験者の主観から効果を計ることに

止めた。

問題点

今回のプログラムにおいて問題点も数点確認された。一つは実施時期の問題である。教務カリキュラム外で行ったため、色々考慮して実施時期を設定しても、試験や集中講義等の日程変更等の影響を大きく受けたことがある。また学部学科によっては連続したプログラムでは参加が不可能であったため、参加できる学生の学部、学科が限られてしまった。この件については学部学科ごとの事情もあり、全て解決することは困難である。しかし、教務カリキュラム外の活動ではあっても、できるだけ教務部と相談を重ねることに加え、新入生のオリエンテーション時に説明を行うなどして個々の学生の対するボランティア活動参加意識を高める働きかけを行うことにより少しずつ解決していきたい。

また、二つ目として、参加学生の個人情報の問題があった。今回参加した学生の中には活動先の施設に親族がいる学生がおり、巡回訪問時にその件について施設側から大学としての対応について質問を受けた。今回は、活動先が決定してから受け入れ施設に学生についての連絡を取ったため、我々もその時点まで知らなかった。しかし、基本的に学生の個人情報の扱いは厳重であり、親族についての情報まで学内で共有するのは不可能である。施設が入所者の親族をボランティアとして受け入れることに対し困惑する面もあると思われるが、今回はボランティア体験ということなので施設側の理解のもと受け入れを承諾してもらうことができた。施設の社会化の流れの中、地域に開かれた施設として地域住民を受け入れることが社会的に要請されていることもあり、今後もこのような場合には話し合いを重ねて理解を得ていきたいと思う。

三つ目は、受け入れ施設の担当者に対して説明会が開催できなかったことである。そのため、現場によってはボランティア受け入れの意義が不明瞭となっており、介護実習との混乱が生じていることが巡回訪問時に判明した。学生が実際に活動する施設をプログラム開始後に最終決定したため、施設の担当者を対象に説明会を開くことができなかった。そのため、ボランティア体験活動の場を提供してもらうことの意義について理解してもらうことが難しかったようである。

もっとも、社会福祉協議会から施設担当者への依頼時にも、初めてボランティア活動を体験する学生が対象のプログラムである由の説明は行っており、施設長宛の大学からの受け入れ依頼文書においても今回のボランティア体験活動の目的は記している。さらに、受け入れを承諾してもらった施設へは事前に施設におけるボランティア受け入れマニュアルを送付している[13]。しかし、現場のニーズとの噛み合わせの問題もあり、実際に直接活動先のボランティア受け入れ担当者と話し合いの場を持たないと、受け入れに対しての理解を得にくいことが判明し、日頃から施設に対するボランティア活動受け入れの働きかけが必要であることが分かった。

おわりに

今回のプログラムは、運営上の問題点もみられたが、有効性については次のことが確認できた。１つ目は参加学生による各福祉施設及び利用者に対する理解が深まったこと。２つ目は自分に対する有用感が形成できた一方で自分の弱さにも気づくなど自己理解の機会となったこと。３つ目は福祉の専門職を目ざす者としての自覚が形成され、今後の勉学などへの動機付けが形成されたこと。４つ目として、ボランティア体験を通じて対社会的能力を養成することができたことである。

これらは概ね長沼の「ＰＡＲサイクル」の目的に沿う結果であったといえよう。また、今回の体験はＲ段階で指摘されるボランティア学習の２つの方向性である「内向きのベクトル」（ボランティア活動主体者としての自己を振り返ることによってボランティア活動の意義を知ること）から、更に「外向きのベクトル」（社会的課題の確認と再発見）を通じ、今後の活動へと発展させていく土台のともなるものである[8]。

今後もこのようなプログラムを大学におけるボランティア教育として行う際には、以下の点が課題となるだろう。全体に短期間でのプログラムであったため事前・事後の研修が不十分であったこと。ボランティアセンターによる教務カリキュラム外のプログラムとして単独に実施したため、各学生の体験したボランティア活動体験の内容が授業内容と連結していないこと。さらに、今後このようなプログラムを、ボランティア論などボランティア活動を教育として設定するためのパイロット的な実践として位置付けるのかどうかの検討も必要である。

特に最後のカリキュラム内の授業として取り入れる方向性については、文部科学省の指導でもあり、現在多くの大学が取り入れつつある。社会福祉関連学部のある本学としては前向きに考えなければならないだろう。しかし、授業の目的や単位数、活動時先や活動時間数など具体的内容については、他大学での実践例などをよく参考にしなくてはならない。医療や福祉の現場では他の実習とのバッティングの問題も大きい。また、カリキュラム

による強制は、本来ボランティアは自発的なものであるという趣旨から外れるという指摘も十分考慮し慎重に取り組む必要があるだろう。

最後に、今回のプログラムに参加した学生の中には、このプログラムの約1ヶ月後に本学地元に大きな被害を与えた台風14号の被災者に対する災害ボランティアとして救援活動に参加した者や、ボランティア体験活動を行った施設の運動会にボランティアとして参加している者たちもおり、少なくとも今回のプログラムは、参加した学生にとって次のボランティア活動への橋渡しとして位置づけることができたといえよう。

* 謝辞

本文中で取り上げた「初めてのボランティア活動体験プログラム」は、本学の地元である延岡市社会福祉協議会や門川町社会福祉協議会、日向市社会福祉協議会に本プログラムの趣旨についてご理解を得た上で、各社会福祉協議会のボランティア担当職員の方々にご協力いただき、実行することができたものである。この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

註

（1）最近のボランティア活動の現状として①活動の多様化と拡大化、②活動の協同化とエンジョイ化、③活動の市民化、④活動の教育化が挙げられている[5]。

（2）本学で平成17年2月にボランティア活動に積極的に参加している学生を対象に“ボランティア活動についての話し合い”の機会を持ったところ、困っていることの1つに後輩が育たないことが挙げられた。

（3）プログラムの期間設定については、事前に本学教務課とよく相談を行い、その時点では全学部の1，2年生が参加可能な期間に設定して講師依頼や施設への受け入れ依頼を始めた。しかし、実際にプログラムを行う時点では集中講義期間の変更、補講や再試験などが重なるなどがあり、結果的には参加可能な学年や学部が限られてしまった。

また、プログラム期間を短期間に設定した理由としては、翌年に市町村合併が控えている地域の社会福祉協議会に対し、長期に渡っては協力をお願いできないという事情もあった。

（4）申し込み時に参加希望の分野を第3希望まで取り、事前研修の初日終了後に改めて取り直したのは研修効果を計るためであった。しかし、研修後に希望分野が動いたのは、必ずしも研修効果だけではなく、希望する活動先に対する交通手段の目途がたったなど他の理由によることも大きかった。

（5）日向市社会福祉協議会のコーディネートによる活動先については、体験活動期間の初日は日向市社会福祉協議会での担当職員による研修と活動先への挨拶となり、実際に現場で活動する期間は3日間であった。

（6）この「ボランティア活動の合意書」の内容は、各施設の代表者宛に、「標記プログラム（九州保健福祉大学ボランティアセンター平成17年度“初めてのボランティア体験プログラム”）で貴施設においてボランティア活動を行うに当り、私は、本学ボランティアセンターによる『ボランティア活動の心がまえ』に留意し、貴施設の決まりに従うことを約束します」という内容であり、学生ボランティアの署名を行うものである。全国社会福祉協議会の文献を参考に作成したものである[13]）。

参考文献

1）塚田健二，竹森康彦，橋本由起子、山本敦之，末吉秀二，岡崎幸友：ボランティアセンター基本構想に関する提言．吉備国際大学社会福祉学部紀要第7号．191-2002，2002.

2）小沢　亘：ボランティア文化の国際比較：「ボランティア」の文化社会学．初版，世界思想社，209-236，2001.

3）木谷宣弘：福祉社会事典．初版，弘文堂，1999.

4）興梠　寛：学生ボランティア最新事情：大学とボランティア．内外学生センター，40-50，2001.

5）岡本栄一：ボランティア活動の土台：ボランティアのすすめ．初版ミネルヴァ，1-14，2005.

6）長沼　豊：特別活動におけるボランティア学習の意義について．日本特別活動学会紀要第6号．23-35，1997.

7）長沼　豊：ボランティア学習の学習目的について．福祉教育・ボランティア学習研究年報第3号．28-45，1998.

8）長沼　豊：市民教育とは何か．初版，ひつじ書房，

2003a.
9）佐々木正道:アメリカの大学におけるサービス・ラーニング：大学とボランティアに関する実証的研究．初版，ミネルヴァ書房，355-367，2001.
10）中田周作：大学教育における「体験学習」導入の社会的背景に関する一考察：福祉系四年制大学における授業としてのボランティア活動に関する調査研究．広島ボランティア活動研究会，5-11，2005.
11）長沼　豊：「大学・短大におけるボランティア関連科目についての実態調査（2002年度）」報告書．学習院大学教職課程長沼研究室，2003b.
12）河内昌彦：学生ボランティア受け入れに関する実証的研究：福祉系四年制大学における授業としてのボランティア活動に関する調査研究．広島ボランティア活動研究会，65-90，2005.
13）全国ボランティア活動振興センター：福祉介護関連施設におけるボランティア受け入れマニュアル．第２版，全国社会福祉協議会，2003.

図１　年齢階級別ボランティア活動の行動者数、行動者率（平成８年、13年）
出典：総理府「平成13年社会生活基本調査（平成13年10月実施）の結果」
図２　ボランティア学習のＰＡＲサイクル
出典：長沼　豊『市民教育とは何か』，ひつじ書房，2003
表１「初めてのボランティア活動体験プログラム」の内容
写真１　オリエンテーションの様子（平成17年度「初めてのボランティア活動体験プログラム」より）
写真２　介助についての事前研修の様子（平成17年度「初めてのボランティア活動体験プログラム」より）
写真３　保育所でのボランティア体験活動の様子（平成17年度「初めてのボランティア活動体験プログラム」より）
写真４　事後研修でのボランティア体験活動報告会の様子（平成17年度「初めてのボランティア活動体験プログラム」より）